

張良

觀世小次郎作

前（後も）

ワキ 張良

シテ 黃石公

季は 地は
雜 唐土

「是は漢の高祖の臣下張良とは我事なり。われ公程に隙なき身なれども。或る夜ふしぎの夢を見る。

是より下邳と言ふ所に土橋あり。かの土橋に何となくやすらふ所に。一人の老翁馬上にて行き逢ふ。かの者左の沓を落し。某に取つて履かせよといふ。

何者なれば我にむかひ。かく言ふらんと思ひつれども。かれが氣色只ものならず。其上老いたるを貴び親と思ひ。沓を取つてはかせて候。其時かの者申すやう。汝誠の志あり。今日より五日に当らん日こゝに来れ。兵法の大事を伝ふべきよし申して夢さめぬ。やうやく日を考へ候へば。今日五日に相当り候ふ程に。唯今下邳の土橋へと急ぎ候。「五更の天も明け行けば。く。時やおそきと行く程に。道は遙に山の端も。白み渡れる川波や。下邳の土橋に着きにけり。く。

シテ
「あら遅なはりやいかに張良。年老いたるものと契

りおきし。其言の葉もはや違ひぬ。我は先刻よりこゝに來り。曉鐘をかぞへ待ちつるに。はや其時刻も杉の門。

地
「待つかひもなしはや歸れ。／＼。汝誠の志。あらば今日より五日に。当らん其日夜ふかく。来らば我もまたこゝに。かならず出で逢ひ。約束の如く伝へん。おくれ給ふな張良と。怒りをなして老翁は。かきけすやうに失せにけり。／＼。

ワキ詞

「言語道断。以ての外の機嫌にて候ふは如何に。又我ながら斯くの如く。ゆくへも知らぬ御事に。かやうに恐れ従ふ事。其故なきには似たれども。大事を伝へて末世に遺し。兵法の師といはれんと。思ふ心を見んためと。／＼。知れば帰るも恨みなし。又こそこゝに来らめと。勇みをなして帰りけり。／＼。
(申入)

後ワキ一聲
「瑠台霜満たり。一声の玄鶴空に鳴く。巴峡秋深し。

五夜の哀猿月に叫ぶ。もの冷ましき山路かな。

地「有明の。月も隈なき深更に。く。山の峠より見

渡せば。所は下邳の川波に。渡せる橋におく霜の。

白きをみれば今朝はまだ。渡りし人の跡もなし。

うれしや今は早。思ふ願ひも満つ潮の。暁かけて
はるかに。夜馬に鞭うつ人影の。駒をはやむる気
色あり。

後ジテ
「抑是は。黄石公と云ふ老人なり。

詞
「こゝに漢の高祖の臣下張良と云ふ者。たゞ公程を見
て君臣をおもんじ。義を全うして心たけく。賢

才人に越え。器量すぐれ。

地「国を治め民をあはれむ志。

シテ「天道に通じて忽ちに。

地「諸仏も感応目のあたり。

シテ「大事を伝へて高祖につかへ。

地「敵を平らげ味方を勇め。天下を治めん謀。汝に伝

へんと。駒をはやめて來り給ふを。張良はるかに見奉れば。ありしにかはれる石公の粧ひ。眼の光りもあたりを払ひ。姿もかゝやく威勢に恐れて。橋本にかしこまり待ち居たり。

シテ詞
「いかに張良。いしくも早く来るものかな。近づき給へ物いはん。

ワキ詞
「其時張良立ち上り。衣冠正しく引きつくろひ。土橋を遙かに上り行けば。

シテ
「天晴器量の人体かなと。思ひながらも今一度。心を見んと石公は。

地
「はいたる沓を馬上より。く。遙かの川にをとし給へば。張良つゞいて飛んでをり。流るゝ沓を取らんとすれども。所は下邳の巖石いはほに。足もたまらず早き瀨の。矢を射る如く落ちくる水に。浮きぬ沈みぬ流るゝ沓を。取るべき様こそなかりけれ。

地「ふしぎや川浪立ち帰り。く。俄に河霧立ち暗がつて。浪間に出づる蛇体のいきほひ。紅の舌をふりたてふりたて。張良を目がけてかゝりけるが。流るゝ沓をおつとり上げて。面もふらずかゝりけり。

ワキ「張良さわがず剣を抜き持ち。

地「張良さわがず剣を抜き持ち。蛇体にかゝれば。大蛇は剣の光りに恐れ。持ちたる沓をさしいだせば。

沓をおつ取り剣を収め。又川岸にえいやとあがり。さて彼沓を取りいだし。石公にはかせ奉れば。

シテ「石公馬より静にをりたち。

地「石公馬より静にをりたち。さるにても汝。善哉々々と。彼一巻を取り出だし。張良にあたへ給ひしかば。すなはち披き悉く拝見し。秘曲口伝を残さず伝へ。また彼大蛇は觀音の再誕。汝が心を見ん為めなれば。今より後は守護神となるべしと。大

蛇は雲井に攀ぢ上れば。石公はるかの高山にあがり。金色の光りを虚空に放し。忽ち姿を黄石と顯はし。残し給ふぞ有難き。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第二輯』大和田建樹著